



・lobet den同様、preisetの語尾音節の最後の音符が8分音符の場合、語尾の-tと次のihnとはリエゾンせざるを得ないでしょう。

・特にここには4分音符1個と8分音符2個からなる「喜び」の象徴音形が多数出て来ます。リズム的な曲ではターンツタツツ(この「ツ」の間[ま]を意識することが大事)というつもりの歌い方をすると効果的です。このリズムを活かすには、preisetの-ei-に割り当てられた最後の音符では、「ア」で伸ばさず早めに「イ」に移行して音量を減衰させると良いでしょう。則ち、この主題は動的な要素が増しているの、ある種の軽さを持たせる必要があります。



・第43小節からLobet den Herrn, alle Heidenの主題とund preiset ihn, alle Völkerの主題が同時に出現するようになりますが、ここで2つの主題の歌い方の違いが意味を持つこととなります。この時代の多旋律音楽では、主題は早く出現したものの方が重要度が高いのですが、Lobet...の主題をテヌートに、und preiset...の主題を軽く歌うことにより、前者が後者に埋もれにくくなります。

### Denn seine Gnade und Wahrheit waltet über uns in Ewigkeit

・リズム的な雰囲気支配する全体の中で、この第58小節第2拍裏～第77小節第1拍は唯一表情的にやや和んだ感じとなります。歌い方はレガート主体。テンポをかなり遅くする例もありましたが、今となっては古いやり方という印象を持ちます。

・第77小節第2拍から始まるEwigkeitのE-に割り付けられた長い音符は、言葉の意味である永遠を象徴しています。そしてここからは再び活気が戻ったリズム的な演奏となる例が多いです。

### Alleluja (元はヘブライ語で「主を賛美せよ」という意味)

・ここからは主題も含めて、パート別にずれて現われるヘミオラの絡みがおもしろい部分です。

・第146小節からのソプラノの旋律は、第99小節から始まる主題の転回形によるゼクヴェンツ(同じパターンの繰り返し)です。

[ 主題 ]



[ 主題の転回形 ]



また同じところから始まるバスには、ヘミオラが3回連続で現われます(実際にはもう2小節前から始まっています)。



第156小節からは主題の転回形によるゼクヴェンツはテノールに、連続ヘミオラはアルトに(歌詞の割り振りが少し替えられて)、それぞれ現われます。したがって第156小節からはソプラノはテノールの旋律を主役として活かすべく、できる所では音の長さを短かめにするなどして、音量感を減らす工夫をすべきです。

//2003.10.15